横浜市立東市ヶ尾小学校だより

令和5年8月28日

8･9月号

# まなびや 東市ヶ尾

## 主体的に動けるチームを目指して

校長　　霜田　恵子

子どもたちの笑顔と無邪気な声が、静まり返っていた校舎に戻ってきました。しばらくぶりに会う子どもたちは一回り大きくなったと感じられ、様々な体験を重ねたのであろうと想像させるたくましい表情を見せてくれます。長期休業明けの子どもたちとの再会の時が、私は好きです。

保護者の皆様、地域の皆様、酷暑のこの夏、いかがお過ごしでしたでしょうか。

私の夏休みは…初日の早朝に母親が病院に搬送されたところから始まり、そこから入院と退院を繰り返すという激動の日々でした。しかし、２つめの病院では家族の付き添いが許され、病室の中から、ある地方都市の基幹病院の２４時間を観察することができました。

高齢で血管が細くなってしまった母は点滴が痛いのか、無意識に針を抜こうとします。また、ずっとベッドに横になっているので昼夜逆転して夜中に起きてしまうこともありました。そんな時、かわるがわるやってくる看護師さんたちが、これまでの経験をもとに母の気持ちを想像して、処置を工夫してくださり、「昼間は車椅子で院内を散歩しませんか。」などと提案をしてくださったのです。おむつに抵抗のある母の気持ちも察してくださいました。決められた治療だけを行うだけでなく、要求を声に出さない患者に目線を合わせて、望んでいることを想像し、できることを考え、労をいとわず対応してくださるのです。また、付き添いの私が、ナースステーションにお願い事をしに行くと、担当者でなくとも快く対応してくださいました。そして、同僚との間で「～を済ませたから、大丈夫ですよ！」「ありがとうございます。助かります！」と連携し合う声も病室に響いてきました。初めに入院した病院にはない光景でした。その病院では、母はベッドに拘束され、チューブや針に触れないように手を包帯で巻かれており、少ない看護師が勤務していました。ある意味「働き方改革」なのかもしれませんが、患者の「人権」を考えると寂しい気持ちです。

教室の中も、職員室の中も、学校の中も、地域の中も、清々しいナースステーションのようにありたいと思います。私は学校関係者として、ルールや経験に基づいて主体的に動ける人間を育てたいし、目の前の人の幸せのために自分の考えを却下されることを恐れず表現していく人材を大切にしたい。そして、人の考えをむやみに否定することなく認め合い、支え合えるコミュニティーって素敵だなと、考えました。病院なら「患者ファースト」であり、学校なら「子どもファースト」でありたい。「働き方改革」をはき違えてはいけない…と、母の寝息を聞きながら思いを巡らせました。

他の先進諸国に比べ、日本の子どもたちは、主体性に欠けると言われて随分時間が経ちます。自分の考えを表現し、しっかり議論し協働できる人材を育んでいくことが教育現場で大事にされなければなりません。子どもの健やかな成長を願い、努めていきます。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

コロナ渦明け、復活した地域のお祭りに顔を出すことができなかった申し訳ない夏休みでした。地域の皆様、ごめんなさい。状況を理解し、温かく支えてくださった周囲のすべての皆様に感謝いたします。